

2025年度 学校評価(自己評価)報告書

評価項目	評価単位	評価のまとめ	
A	I	1.教育目標	<ul style="list-style-type: none"> 今年度も生徒の自主性を尊重し、広い視野を持った生徒として成長するよう、見守りながら生徒の活動を支援した。 あらためて教育活動を見直す中で、生徒主体の活動や自主自律の達成に向けて一層の工夫を行い、学校教育目標が果たせるよう最大限努力した。
		2.教育課程の編成	<ul style="list-style-type: none"> 教科内で評価方法の振り返り確認し合ったりすることでよりよい教科指導とその評価に向けた実践を行うことができた。来年度は、各教科の評価実践を持ち寄り、教科を超えて共有しあう機会を持ちたい。 「創造的思考の育成」「学習語の実践的な活用の指導」をミッションとして、教科や教科外活動含め、学校カリキュラム全体について検討することができた。
		3.年間授業日数・時数	<ul style="list-style-type: none"> 行事など、生徒への教育に有効な取り組みとなるよう検討を進めた。一方で、土曜授業を少しずつ減らすなど、教員の働き方も視野に入れていきたい。 例年にならって授業日数・時数ともに確保することができた。
		4.教育活動とその成果	<ul style="list-style-type: none"> 授業における様々な工夫はもちろんのこと、朝礼時の小テスト、放課後学習会の実施など、基礎学力の定着を図る工夫を行うことができた。また、継続して Chromebook の持ち帰りやオンライン授業を継続することで、欠席生徒等への対応がしやすくなった。 鏡影会の皆様の協力も得て自主研究を支援する体制と整えることができた。ポスター発表を保護者に公開したり、学校公開や公開研究会の場などでも自主研究の成果を積極的に示したりするして、研究成果を発信することができた。 今後、教育課程全体の見直しを行っていく中で、効果的な放課後活動の在り方などの検討と合わせて生徒との時間確保の検討を行う必要がある。 生徒 Google アカウントのセキュリティ対策として Soliton DNS Guard を新規設定し、学習活動に適した運用・アカウント管理を行った。 担任、養護教諭、カウンセラー、ソーシャルワーカーとの連携が円滑に進められており、カウンセラーやソーシャルワーカーとの面談を希望する生徒・保護者が増加し、様々な面からサポートする体制が構築されている。
		5.行事	<ul style="list-style-type: none"> コロナ禍前のプログラムを踏襲しながら、新たな形での行事の企画立案を実施できた。 保護者に生徒たちの授業の取り組みを見ていただく機会として、参観週間を年3回を実施した。 生徒祭や芸能鑑賞会など、保護者参観の機会を設けた。生徒祭では受検生や在校生保護者以外の参加も可能にした。
		6.進路指導	<ul style="list-style-type: none"> 学級担任、学年主任、学年教員、委員会でごまめに情報共有をし、生徒一人ひとりの考えや志望をもとに丁寧に進路指導を行うことができた。 学年では生徒と担任との面談を計画的に設定するなど、生徒の進路に関する相談や指導を的確に行うことができた。保護者との連携を大切にすることができた。 都立高校に関する web 出願や中学校英語スピーキングテスト(E-SATJ)の変更の情報や、私立高校の推薦関係の情報などを入手し学年に伝えることができた。
		7.研究・研修	<ul style="list-style-type: none"> 昨年度からの継続研究である「創造的思考」について、授業外の特別活動、学級活動も含め、検討を進展させることができた。研究開発学校第一年次として、学習語彙に関する研修につとめた。 「グローバル教育」を軸に総合カリキュラムも再構築する検討に着手することができた。道徳については、9教科や総合カリキュラム全体との関連を意識したアクティブな道徳を実施できた。また、道徳の実践記録の蓄積に着手した。 司書による資料活用・文献引用の方法などの指導をグループごとに前期・後期に各 1 回実施し、指導のカリキュラムをめざすことができた。司書の協力により、各生徒のテーマに応じて参考資料をそろえることができた。
		8.帰国・国際教育	<ul style="list-style-type: none"> Kids to Kids の回数を増やし、帰国生どうしの交流の機会を増やした。 お茶中外との国際理解・異文化間交流の取り組みとして、東京学芸大学、東京大学の留学生との交流授業を実施することができた。
		9.自治(会)活動の指導	<ul style="list-style-type: none"> 部活動巡回指導員の継続配置により、部活動統括顧問のもとに平日部活動の巡回を行うことで、安全確保と生徒主体の部活動運営を実現した。また、部活動指導員の導入を進め、指導の充実と教員の負担軽減を図った。 定期的に部長会を設け、出欠確認や部日誌の確認をするとともに、下校時刻や決まりを守ること、安全管理について意識を高めるよう声掛けをした。また、各部の実態に応じてデジタル部日誌を活用できるよう整備した。 委員会活動において、「委員長会連絡シート」を設け、役員会や各種委員会への依頼や意見を交流できるようにし、生徒会活動の活性化につなげた。
		II	II
2.出納・経理	<ul style="list-style-type: none"> 情報モラル講習会や芸能鑑賞教室など、全校生徒に等しく費用が発生するものに関しては、学年費から共通学年費へ移行し、会計処理の手間を減らすことができた。 預り金で執行できる範囲が狭まったことから、今後の校費や寄付金への負担が懸念される。 今年度は多額の遺贈寄附や保護者からの寄附があった。このような寄附がしやすいようなシステムを構築しておきたい。 		
3.施設・設備	<ul style="list-style-type: none"> 学校教育後援会鏡水会の新事業費として、図書室の書架類、保健体育科のセフティーマットや iPad の購入などに活用し学習環境の整備と充実を図ることができた。 体育館と第1校舎2・3階に冷房が設置された。今後は第1校舎1階に整備したい。 新しい印刷機の導入を予算確保含めて検討する。 		
4.健康	<ul style="list-style-type: none"> 学校保健計画に位置づけている保健目標に則して、保健便りや掲示物、授業時間を使った学習活動等とおして保健教育を実施した。保健便りについては、「お茶中 web」へ掲載したり全教員へ付加説明と共に事前周知することによる学級活動での活用促進をしたりした。 日常の養護教諭と生徒とのかかわりについては、学級担任やスクールカウンセラーと共有し、週1回開かれる教育相談委員会でも報告し、対応を講じた。 		

2025 年度 学校評価(自己評価)報告書

評価項目	評価単位	評価のまとめ	
5. 安全		<ul style="list-style-type: none"> ・学年指導と連携して問題行動に対応し、学校生活上ルールの確認が必要な事柄については随時検討し、学校全体での足並みをそろえた対応に努めた。 ・学校生活アンケート等3種のアンケートを記名式フォームで実施し、対応が必要な内容については、迅速に状況把握に努め対応し、各学年の指導に生かすことができています。 ・生徒指導記録のデジタル化を進め、情報の共有化を行った。 ・防災マニュアルの改訂、防災用品の点検・充実を行った。 ・附属学校課及び大学の協力を得て、音羽寮学生の登校サポーターの導入により、登下校中の防犯、安全指導を実現することができた。 ・いじめ防止対策委員会を週1回開催し、各学年の生徒の情報の共有及び対応の検討や基本方針、いじめ防止マニュアル、チェックリストの改訂など、校内のいじめ防止に向けて組織的に対応した。 ・生徒にはいじめ防止に向けて講演を行ったほか、アンケートや面談の機会を設け、早期発見に努めた。 ・教員研修の機会を年3回行い、教員一人一人のいじめ問題への対応力の向上を図った。今年度は特にスクールリーダーとの連携について研修を進めた。 	
	6. 情報	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒・保護者用の「生成 AI 利用ガイドライン」を策定し、保護者承諾のもと生成 AI の運用を開始した。 ・教職員向けの「ICT の利用ガイド」を新しく発行し、安全な運用に向けて働きかけた。 ・AX 推進プロジェクトの一環として、シャドーIT の撲滅に向けて動き出した。 	
7. 開かれた学校		<ul style="list-style-type: none"> ・2025 年度版学校案内(冊子版、ウェブ版)を作成し、公開行事での配布やウェブ掲載を行なった。 ・公式ウェブサイトの更新を週1回～数回のペースで行いながらサイトの運営を図った。 ・オープンスクール「お茶中生がガイドする校舎見学ツアー」を開催し、大変好評であった。 ・学校評議員会では、全学年・全分掌からの短い報告から、2～3のその年度に特徴的なトピックス的な話題を取り上げて報告する形式に変え、学校側の負担を少なくするとともに、評議員に学校の動きをイメージしやすくなるように努めた。 	
	8. 入学検定	<ul style="list-style-type: none"> ・一般検定の「報告書」は従来の PDF 版の他に、小学校の先生が作成しやすい Excel 版を作成・運用することができた。 ・web 出願については、前年度の内容を踏襲する部分が多く、確認作業の短縮につながっている。一方で web での作業は担当分担が行いにくいいため、担当者負担がかなり大きくなってしまいが課題である。 	
9. 保護者との連携		<ul style="list-style-type: none"> ・PTA・鏡水会ともに総会は旧来の形で実施した。PTA 運営も前年の引継ぎを受けて昨年度よりスムーズだった。鏡水会役員会等については、会議の ICT 活用の検討を進めるなど実質的な運営課題を検討できるようになった。 	
B	I	1. 連携研究	<ul style="list-style-type: none"> ・月1回の連携研究会の時間を確保することでテーマ別部会での情報共有や学びを行っている。 ・「創造的思考の育成」と研究開発学校「学習語の実践的な活用の指導」の研究において、大学の先生方の指導・助言を得ることができた。 ・お茶大コンピテンシー育成開発研究所、SDGs推進研究所の研究にメンバーが参加し、アンケートにも協力した。
		2. 授業交流	<ul style="list-style-type: none"> ・研究室訪問は8年目を迎え、大学の先生方のご協力もあり、依頼からまとめまでの一連の流れに沿ってほぼ例年通りに進めることができた。実施学年にあたる第2学年ではキャリア教育や総合等との関連性を持たせながら深まりのある実践を行えた。 ・課題発掘セミナーは、各教科、特活の取り組みで一部大学の先生が関わってくださっている。
		3. 教育実習	<ul style="list-style-type: none"> ・I 期はお茶大生 24 名と本校卒業生 1 名、II 期はお茶大生 19 名、計 44 名の教育実習生を通常どおり受け入れた。 ・途中辞退も評価Dも無くつつがなく進めることができた。
		4. 専門委員会等	<ul style="list-style-type: none"> ・情報専門委員会、附属学校セキュリティポリシーの作成を進めた。
		5. 大学の講義担当	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度は6教科の附属中学校教員が教科教育法を担当した。教科によっては教科授業に ICT を活用するための実践演習等を行うことができた。
		6. インターンシップ	<ul style="list-style-type: none"> ・放課後の補習や担任業務の作業補助などの学校インターンシップを受け入れることができた。
	II	1. 授業参観研修生受け入れ	<ul style="list-style-type: none"> ・「開かれた学校プロジェクト」として、他校、教育センターなどからの研修・視察を日常的に多数受け入れることができた。
社会貢献		2. 公開研究会開催	<ul style="list-style-type: none"> ・公開研究会では約310名の参加者と授業及び協議を通して「創造的思考」について協議することができた。
		3. 現職研修	<ul style="list-style-type: none"> ・本年度は該当項目なし
		4. 途上国支援	<ul style="list-style-type: none"> ・本年度は該当項目なし
		5. 出版活動	<ul style="list-style-type: none"> ・研究紀要を発行し、研究成果の普及に努めた。
		6. 各種研究会への協力	<ul style="list-style-type: none"> ・全附属副校長会、関附連、他校公開研究会に多数の教員が参加することができた。 ・学会、研究会発表などに多数の先生方が参加されている。引き続き先生方の発信を支えていきたい。
重点課題について			
<p>①教育課程:今年度前半は創造的思考の育成の3年次研究に取り組みその成果を公開研究会で発表した。生徒の声も活かしつつ、教育課程改善に向けての検討を進めることができた。</p> <p>②学校運営:安全、安心な教育環境の実現に向けて、SC や SSW との連携を進めることができた。いじめ防止対策について、基本方針・マニュアル・チェックリスト等を策定できた。校内委員会を毎週定例開催して体制を整えた。また同対応のための研修会を6月(合同研)・7月・3月に実施した。生徒指導部が中心となって、非常勤講師の参加も得ながら、不審者対応訓練・避難訓練等の危機管理体制づくりを図った。部活動検討委員会を組織して部活動のあり方の見直しを進め、企業と連携して外部指導者による部活動実証実験を行うことができた。</p> <p>部活動の見直しについては、さまざまに検討を重ねたが、中体連大会からの脱退については慎重に検討することになった。部活動指導員の導入を一層進めていくために、保護者からの預かり金に指導員雇用の費用を組み入れた。</p> <p>③大学等の連携:連携研究のほか、昨年度から始まった第4期中期目標・中期計画で新たに発足したコンピテンシー育成開発研究所、理系女性育成啓発研究所、SDGs 推進研究所等とも連携を始めており、今後一層中学校の研究成果や教育実践を活用していきたい。教科教育法等の授業、教育実習やインターンシップを実施できた。</p> <p>④社会貢献:公開研究会を対面で実施し、多数の参加者のもと研究を深めることができた。また研究推進委員会を中心に、R7 年度～R10 年度研究開発について多くの研究者・専門家の助言・指導のもとに研究デザインを検討しており、今後も学校全体で社会貢献に努めていきたい。</p>			